

Globe の実践を振り返って（幼児センター）

4歳児

最初は「Globe って何？」というところから始まり、すぐに ALT の名前や好きなものを覚えて Globe を楽しみにするようになっていった。絵本を読んでもらった際、内容が難しく理解できていない様子も見られたが、ALT のリアクションを見て「～っていうこと？」と園児が自発的に質問することで、楽しみながら理解していく姿も見られた。また、覚えた英単語を生活の中でも使うなど、英語に親しんでいる様子があった。



5歳児

年長になり、本格的に英語でのやり取りが増えることに期待感をもって参加することができていた。初めは、聴き馴染みのある色の名前やくだものの名前等を学ぶことで、英語に触れる機会の少ない児も無理なく参加することができた。単語にジェスチャーをつけ、体を動かしながら覚えることができて、単語の意味をイメージしていた。また、ゲームを取り入れ、その日に学んだ単語を使って遊ぶことで、苦手さを感じている児も楽しく参加することができていた。さらに、ハロウィンやクリスマスなどの季節の行事に合わせた単語を取り入れることで、英語が身近なものとして感じるきっかけになっていた。事後活動として、クラスの中で朝の日付確認の時に天気を英語で答えたり、お当番活動の中で気持ちを英語で表したりすることで、日々の保育の中でも英語に親しむことができていた。



成果

- ・初めて英語を発音することに消極的な姿も見られたが、慣れてくるとわからなくても真似しようとする意欲があり、元気いっぱい単語を復唱できていた。
- ・英語に苦手意識がある児もゲームが始まると元気になり、楽しく参加することができていた。
- ・Globe の時間が楽しいと思える児が次第に増えていき、リスニングの力がついてきた児は、積極的に発音する姿が見られるようになってきている。

課題

- ・リスニングの苦手な児は聞き取ることが難しいので、積極的に参加できていない姿が見られる。楽しく参加できるように、保育者が個別に関わりながら英語に親しめるようにしていく。

令和 7 年度 東川小学校Globe振り返り

○成果 ●課題

1 取組の重点について カリキュラムのアップデート

- 週1回のGlobe打合せ会議を通して、各学年で協力しながら授業研究を深めることができた。また、Globeは、児童の非認知能力や内的成長、友達との関わり等において、学級経営と密接に関わっている。**学級担任を中心に**、JTEとALT、特別支援担当等の役割を明確にし、授業の実践を行うことができた。
- 体験的な活動を含むカリキュラム実施や外部講師の招へい、学校外の方々と交流活動を行うことができた。
- これまでの実践に基づく成果と課題を踏まえ、カリキュラムを改善し、新たな視点を取り入れながらカリキュラムを編成する必要がある。
- 今度新しく着任する教職員が、Globeについて理解し実践することができる持続可能な環境を構築していく必要がある。



1年生 アイヌの踊りを体験



2年生 日本語学校の学生さんと交流



4年生 学習発表会でGlobeの歌を発表

2 アンケートのふりかえり (12月アンケート(3年生以上実施))

- 「Globeを楽しい」と感じている児童が大変多い (**98%が「楽しい」と回答**)。
- 世界への関心について、肯定的な回答をする児童の割合が増加した。(**「他国の人と友達になったり、他国のことについてもっと知りたいと思っていますか。」【R6:94.8% R7:95.7%】「考え方や文化のちがう人とも、ともに協力していいと思いますか。」【R6:97% R7:97.3%】**)

	成果	課題	
3年生	・「好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童が100%。 ・歌やダンス、ゲームを通して、楽しみながら英語の音やリズムに親しむ姿が見られた。 ・「英語を使って様々な国の人と話したい」という意欲も非常に高く、一年を通して英語への関心と意欲を高めることができた。	・「英語を覚えるのが難しい」と感じる児童や、「みんなの前での発表」に緊張や恥ずかしさを覚える児童も一部見うけられた。	What's this クイズ大会
4年生	・ジェニー先生やJETsとの交流を通して、「他国の文化や生活を知る楽しさ」を具体的に実感し始めている。英語を話すことが「かっこいい」という憧れや、将来の役に立つという意識も芽生え始めている児童が見受けられた。	・発表に向けた「英語を覚えること」への難しさを挙げる声が複数見られた。	ゲストに日本の遊びを教えよう!
5年生	・農育を取り入れた学習は今年度で2回目となり、社会科・家庭科・総合の学習で学んだことを生かす取り組みとなった。教科横断的な学びを深めることができた。 ・「おにぎりマルシェ」という具体的な活動や、ポスター制作やプレゼンを通して「伝える喜び」を体験することができた。 ・宇宙飛行士やパイロットといった具体的な将来の夢と関連付けて、英語の必要性を強く認識する児童も増えてきた。	・習熟度の差が出始めており、「簡単すぎてつまらない」と感じる児童と、「難しくて話すのが大変」と感じる児童の両方が見られた。	東川ライスマルシェ
6年生	・単なる言葉の習得を超え、世界の文化や歴史、さらには人口・環境問題などへの深い関心へと学びが広がっている。英語が伝わった時の達成感を味わい、「考え方や文化が違う人とも協力していい」という高い共生意識も育まれてきた。	・「英語を話せるようになりたい一方で、意味の理解が難しい」といった、より高度な語学学習上の壁に直面する児童も見られた。	ケニアの生活を知ろう!

第一小学校取り組みまとめ

対象・実施時期:2025年12月

回答者:生徒19名(3年生2名 / 4年生4名 / 5年生9名 / 6年生4名)

1. 重点目標に対する振り返り

各目標に対する評価と成果

- 担任の先生方の多くがGlobeの授業運営に慣れており、現場での柔軟なサポートを受けながら授業を進めることができた
- 地域資源を活用した授業(東川町内ガイドさんとの授業実施など)を通して、新しいつながりや学びの広がりを生み出すことができた
- 結果的に農育や社会科、フロンティア学習と連動した活動を取り入れることで、教科横断的な学びを実現できた

課題

- 打ち合わせの機会が十分に取れない場面もあったが、その分、現場対応力や即時共有の重要性が明確になった
 - JTEが初任であったため、準備に時間を要する場面が多く、今後のサポート体制づくりの必要性が見えてきた
 - 授業当日の内容共有になるケースがあり、事前共有の仕組みづくりが次の課題として整理された
-

2. 成果と課題(学年別)

① 1・2年生

成果

- 座って行う活動よりも、身体を動かす歌やアクティビティを中心にした授業で、児童の集中力と反応が高まった
- ゲームを多く取り入れることで、全体的な発話量が増え、英語への抵抗感が下がった
- 単元導入段階で身体的な活動を重視したことで、自然な形で英語に入っていく様子が見られた

課題

- 活動量が多いため、単元構成全体のバランスをより意識する余地がある

② 3・4年生

成果

- 特に4年生はGlobeへの親しみが高く、毎回楽しみながら主体的に取り組む姿が見られた
- ゲーム性のある活動では、ルールを守りながら英語を使う姿が定着しており、活動型学習との相性が良かった
- 成果物作成では、限られた素材の中で多様なアイデアを出し、工夫して表現する力が発揮されていた

課題

- 成果物作成にじっくり取り組む分、時間配分の工夫が今後のポイントとして浮かび上がった

③ 5・6年生

成果

- グループワークが安定して機能しており、特に6年生が落ち着いて5年生を見守りながら参加する姿が見られた
- ゲーム性を取り入れた活動により、楽しみながら学ぶ雰囲気が形成された
- 単元のゴール設定や問いかけを工夫することができた
- 新出表現や語彙にとどまらず、「伝えたいこと」をもとに多くの質問が生まれた
- 発表では、前に出ることを避けるのではなく、グループ内で役割分担をするなどの工夫が見られた

課題

- 歌の難易度について、児童の様子を見ながら段階的にレベルアップする余地がある
-

3. 改善案

➤ 重点目標に関わる改善案

- 年度初めに「最低限共有しておきたい授業情報」を整理した簡易共有フォーマットを作成する
- 初任JTE向けに、単元準備の流れや参考資料をまとめたガイドを整備する
→これまでの蓄積された資料がロイロノートの資料箱や全小公務(DISK1)の中にあるので、それを元にし、周辺3校と東川小学校が同じフォーム「略案の型」で計画していけば、お互い相談もしやすいし良い。新たなものを作るのではなく、これまでのものに加除修正すると良い。
- 短時間でも事前に方向性をすり合わせるミニ打ち合わせや共有ツールの活用を検討する

➤ 学年別の改善案

- 1・2年生
 - 導入段階では身体活動を多めに設定しつつ、後半で少しずつ落ち着いた活動へ移行する構成を検討しても良さそう
 - 「動きながら学ぶ」活動を単元の定番として整理・蓄積する
- 3・4年生
 - インプットの時間を簡潔にまとめ、アウトプットに十分な時間を確保する授業設計を意識する
 - 英語ゲームを積極的に取り入れつつ、活動のねらいを事前に共有する
- 5・6年生
 - 高学年の実態に合わせて、少しチャレンジングな歌や表現も段階的に取り入れる
 - 問いを軸にした導入を継続し、思考と言語表現をつなげる設計したい

4. まとめ

- 事前共有・打ち合わせの負担を減らすためのシンプルな情報共有の仕組みを整える
- 初任者でも見通しをもって準備できるよう、単元設計や実践例の蓄積を進める
- 学年ごとの特性を踏まえた「活動の型」を整理し、次年度以降に引き継げる形にする
- 授業内容思案・打ち合わせの時間を取れるように、打ち合わせの方法を工夫する

5. アンケートの結果分析

① 全体の分析と傾向(3～6年共通)

1. 「Globe」への評価は非常に高い

- ほぼ全員が「好き／どちらかといえば好き」
- 理由は一貫して以下：
 - ゲーム・歌・活動が楽しい
 - 外国の人・ゲストと話せる
 - 英語が「体験」として残っている

👉 授業の設計思想(体験・交流・活動中心)はこのままで良さそう

2. 英語の有用性認識は全学年で高い

- Q8「英語は役に立つ」
→ ほぼ全員が肯定
- Q10「英語を使えるようになりたい」
→ 大多数が「なりたい／どちらかといえばなりたい」

👉 「やらされてる教科」ではなく、目的のある道具として英語を見ている可能性が高い。

3. 自己認識・自己効力感はややばらつく

- Q2「自分にはよいところがある」
→ 3年・一部5年で揺れあり
- Q3「自分の考えを表現できる」
→ 学年が上がるほど「どちらかといえば」が増える

👉 成長と同時に自己評価が現実的になっている可能性がある。

4. ローカル理解は強い

- 東川のよさ：
 - 水・米・自然・人
- 日本のよさ：
 - 食べ物・治安・平和・文化

👉 Globeが「英語だけ」になっていない証拠で、地域理解と結びついていることを示唆している。

5. グローバル志向は明確

- Q14・Q15
→ 他国の人と知りたい／協力したい という回答がダントツで多い
- Q13(世界課題)
→ 5・6年で明確に増加

👉 ただ英語が「好き」から、将来どんな状況でいまこの学びが活きるのか「考える」を想像しているから？

② 学年別傾向

◆ 3年生

特徴

- 「好き」の理由がシンプル
 - 英語を覚えられる
 - 楽しい
- 自己表現への自信はまだ不安定

◆ 4年生

特徴

- 記述が一気に豊かになる
- 人・自然・行事など具体化
- ゲスト・交流の価値を言語化できている

読み取り

- Globeの「ゲスト交流」が最も機能している
- 体験重視が刺さっている

👉 正解だが、高学年～中学校への接続を考えると、多少知識として勉強する時間也需要か？

◆ 5年生

特徴

- 回答の幅が最大
 - 強い肯定から、やや距離感のある回答まで混在
- 一部に
 - 「英語はいらない」
 - 「なりたくない」という声も出現

◆ 6年生

特徴

- 表現が抽象化・社会化
 - 平和、戦争がない、文化、治安
- 「役に立つ」の意味が将来・社会に向く

読み取り

- 「英語＝自分の可能性」という認識が芽生えている
 - 思考が分化・批評的になる時期
 - 「楽しい」だけでは納得しなくなる
-

③ 見通し

カリキュラム面

- 3～4年：体験・交流重視でOK
- 5年：「なぜやるのか」を言語化する場が必要
- 6年：世界課題・社会との接続を明示すると伸びる

第二小学校取り組みまとめ

対象・実施時期:2025年12月

回答者:生徒27名(3年生4名 / 4年生12名 / 5年生5名 / 6年生6名)

1. 重点目標に対する振り返り

各目標に対する評価と成果

- 農育と関連づけた単元により、結果的に社会科での学習内容とGlobeのローカル要素が自然につながった
- 季節行事を「全学年Globe」として実施できたことで、Globeスペシャル的な位置づけとなり、授業やカリキュラムのスリム化にも寄与した
- 参観日にGlobe授業を実施し、授業の様子や学びの価値を保護者に直接伝える機会をつくることができた
- 各単元で、調べ学習から入る導入やゲスト招待から入る導入など、多様な導入方法を試すことができた

課題

- 全学年実施や行事型の取り組みについて、今後は「どの位置づけで行うか」を整理することで、さらに効果的な運用が期待できる
 - 参観日での実施をきっかけに、保護者や地域の方々にとって開かれたglobeになる余地が見えたと感じる
-

2. 成果と課題(学年別)

① 1・2年生

- 成果
 - 身体的な活動やアクティビティを取り入れることで、児童の参加意欲や反応が高まった
 - ゲーム中心の活動は、英語への親しみやすさにつながった
- 課題
 - 新出語彙・表現の練習と遊びのバランス調整が今後のポイント
 - 成果物作成に長時間取り組むよりも、活動完結型の授業構成がより適していると感じる

② 3・4年生

- 成果
 - 人数が多いクラスでは、ゲーム形式での新出表現・語彙練習が効果的に機能した
 - 成果物作成は、グループやペアでの活動にすることで、協働的な学びにつながった
 - 3年生の人数が少ないことを活かし、教え合いや役割分担など、児童同士の関係性を活かした活動が展開できた
- 課題
 - 学年構成の影響で、歌の選択に工夫が必要な場面があった
 - 踊り中心の歌では恥ずかしさが出やすく、発話中心の活動では発話につながりにくい場面も見られた

③ 5・6年生

- 成果
 - 今年度は単式編成であったため、学年ごとの特性に応じた異なる取り組みを実施できた
 - 一部の単元では、複式での実施も工夫することができ、柔軟な編成の可能性が見えた
 - 成果物づくりへの意欲が高く、ポスターやポートレート作成などのアウトプットでは質の高い表現が期待できると感じられた
 - 6年生は落ち着いた学習姿勢があり、表現活動や語彙練習では、より多く発話する機会を設定できた
 - 歌を楽しむ姿が見られ、学習への前向きな雰囲気づくりにつながった
 - 5年生は活動的で、身体的なアクティビティを取り入れることで、表現や語彙への慣れが促進された
 - 課題
 - 発表形式のアウトプットについては、安心して取り組めるよう、十分な練習時間を確保する工夫の余地があった
 - 歌について、単元内容との関連づけ方を柔軟に考える余地がある
-

3. 改善案

- 重点目標に関わる改善案
 - 季節行事型Globeを「共通化できる単元」として整理し、年間計画の中での役割を明確にする
 - 参観日では、保護者参加型のミニ活動や対話要素を取り入れることを検討する
 - 単元ごとの導入パターンを蓄積し、目的に応じて選択できるようにする

- 学年別の改善案
 - 1・2年生
 - 身体活動と練習活動のバランスを意識した授業設計を行う
 - 担任の先生と密に連携し、クラスの実態に合わせた活動量を調整する
 - 各時間で活動が完結する構成を基本とし、テンポよく進める
 - 3・4年生
 - 歌詞付きの歌を選び、「歌える・聞き取れる」という実感を大切にする
 - 新出表現や語彙練習は、引き続きゲーム形式を基本とする
 - 成果物作成は、グループ・ペア形式を前提に時間設計を行う
 - 5・6年生
 - 成果物作成を中心としたアウトプットを計画的に設定する
 - 発表活動では、段階的な練習時間を確保し、成功体験につなげる
 - 歌は単元に厳密に縛らず、児童自身が選ぶ要素を取り入れることも検討する
-

4. まとめ

- ローカル・教科横断・季節行事を組み合わせたGlobeの位置づけを整理し、年間設計に反映する
 - 学年構成や児童の特性に応じた活動・歌・アウトプットの「選択肢リスト」を整備する
 - 担任との連携を前提とした授業設計を進め、役割分担と共有の明確化を図る
 - 一回あたりの打ち合わせ時間を軽減したり、回数を最小限に抑えるため、單元ごとの打ち合わせに変更するなどの工夫が必要だ
-

5. アンケートの結果分析

① 全体の分析と傾向(3～6年共通)

1. 「Globe」への評価は高水準

- 多くの児童が「好き／どちらかといえば好き」と回答
- 好意的理由として多く挙げられた内容
 - ゲスト・外国の人との交流が楽しい
 - ゲームや歌など活動が楽しい
 - 英語が少しずつ分かるようになる実感

👉 **Globe**は「交流×体験」の授業として定着している。

2. 英語の有用性の実感と意欲の高さ

- 「役に立つ／どちらかといえば役に立つ」が多数
- 「なりたい／どちらかといえばなりたい」が中心
- 具体的な使用場面
 - 海外旅行
 - 他国の人と話す・友達になる
 - 日本・東川の紹介
 - 仕事で使う

👉 英語が“勉強”ではなく“使うもの”として理解されている。

3. ローカル・ナショナル理解の定着

- 東川町のよさとして繰り返し登場
 - 水(無料・おいしい)／米／自然／景色／人の優しさ／イベント
- 日本のよさとして登場
 - 食べ物／文化／平和／治安／礼儀／歴史

👉 **Globe**が地域理解と結びつき、発信意識につながっている。

4. 多文化理解・協働意識の基礎

- 他国理解や交流意欲(Q14)の肯定が多い
- 異なる文化と協力する意識(Q15)も概ね肯定的

👉 多文化共生の土台となる態度は育っている。

5. 学習への距離感の顕在化(少数)

- 「あまり好きではない」「楽しくない」「英語が難しい」などの声が一部
- 参加意識や交流意欲が下がる回答も少数あり

👉 全体としては高評価だが、個人差への支援設計が必要。

② 学年別の分析と傾向

3年生

特徴

- ゲストとの交流や英語体験を「楽しい」と捉える回答
- 「苦手だったけど覚えて楽しくなった」など成長実感の記述
- 東川のよさは具体(米・水・自然)で語られる
- 世界課題や協力意識は肯定が中心

👉 世界とか協力はまだ抽象的な概念なので、**globe**の活動内容を通して意識が育っていく

4年生

特徴

- 回答数・記述量が多く、経験の幅が広い
- 活動(ゲーム・制作・歌・交流)への具体的言及が豊富
- 地域理解が多面的(景色、人、文化、数値情報など)
- 一部で「楽しくない」「役に立たない」「交流が好きではない」など距離感の表出

👉 体験を言語化できる時期だが、個人差が最も見えやすい段階

5年生

特徴

- 英語を「将来」「生活」「社会」と結びつける視点の増加
- 地域・日本理解が安定(米・水・自然＋食・礼儀・文化など)
- 交流意欲は高いが、「話すのが好きじゃない」などの慎重な声も出現
- 世界課題への関心は「どちらかといえば」が増え始める

👉 “楽しい”を超えて知っていることや好きなことを発信していくことで、「なぜやるのか」を自分ごととして捉えられるようになるといい

6年生

特徴

- 英語を世界理解・文化理解と結びつける記述
- 東川の価値を象徴的に語る表現(景色、つながり、町の特徴)
- 英語の難しさを自覚した現実的な回答が混在
- 交流意欲・協働意識は概ね肯定だが、参加意識が下がるケースも少数

👉 それぞれの特技を活かして活動することで、多様なアウトプット方法を増やすことが大切

③ 示唆

1. 学年進行に応じた焦点設計の必要性

- 低学年: 交流体験と楽しいを中心として活動を中心に据える
- 中学年: 体験の言語化(何ができるようになったか、何を知ったか)
- 高学年: ローカルの要素で学ぶ理由を自分ごとと捉えられるようになることと、色々な種類の成果物を作れるようになる

👉 体験 → 言語化 → 意味づけ(社会接続)という設計が効果的

2. 個人差への支援設計

- 「話すのが苦手」「楽しくない」「難しい」と感じる層の存在
- 参加意識や交流意欲が下がるケースへの手当

第三小学校取り組みまとめ

対象・実施時期:2025年12月

回答者:生徒16名(3年生6名 / 4年生4名 / 5年生2名 / 6年生4名)

1. 重点目標に対する振り返り

各目標に対する評価と成果

- ALTの入れ替わりに伴うオンボーディングが比較的スムーズに進み、新しいALTも授業に段階的に関わることができた
- 学年や単元の特性に応じて、身体的活動・制作活動・発話練習など、多様なアプローチを柔軟に取り入れることができた

課題

- 祝日が重なる時期が多く、授業回数の調整や進捗管理の重要性がより明確になった
 - ALT着任直後の関わり方について、より丁寧な設計を行うことで、心理的安全性をさらに高められる可能性が見えてきた
-

2. 成果と課題(学年別)

① 1・2年生

- 成果
 - 授業運営は全体として安定しており、大きな問題なく実施することができた
 - 第三小学校では、校庭周辺に栗やとちの実など自然環境が豊かであり、学習環境としての強みが確認できた
- 課題
 - 教室内活動に加えて、環境を活かした学びの可能性がさらに広がりそうである

② 3・4年生

- 成果
 - アルファベットの単元では、「アルファベットさがし」など、遊びながら学べる導入活動が非常によく機能した
 - 身体的なアクティビティを取り入れると、特に意欲的に取り組む児童が多かった
 - 図形を使ったショップのロールプレイでは、役割を明確にすることで、活動の質と集中度が高まった
- 課題
 - 今後の学年進級を見据えると、より身体性を活かした活動設計の比重を高める余地がある

③ 5・6年生

- 成果

- 6年生は明るく活発に活動し、発話練習と制作物作成の両方に柔軟に対応できていた
 - 手を動かす活動・話す活動のどちらも適応できるため、単元設計の自由度が高かった
 - 課題
 - 5年生は少人数での授業であったため、グループワークや調べ学習において意見の多様性を広げる工夫が必要であることが見えてきた
-

3. 改善案

- 重点目標に関わる改善案
 - ハロウィーンやクリスマスなど、合同実施可能な授業を計画的に組み込み、年間の授業実施日数を安定させる
 - 新しいALTが着任した際には、およそ1週間は授業見学期間を設け、関わり方について相談できる時間を確保することで心理的安全性に配慮した円滑な参加につながる
 - 年間計画段階で「祝日が多い時期」をあらかじめ想定した授業実施計画を行う
 - 学年別の改善案
 - 1・2年生
 - 校庭や学校周辺の自然を活用した屋外活動を積極的に取り入れる
 - 季節や環境と結びつけた活動を単元設計に組み込む
 - 3・4年生
 - 身体的アクティビティを軸にした単元構成を基本とする
 - ロールプレイ活動では、引き続き役割設定を明確にし、参加しやすい構造をつくる
 - 5・6年生
 - 少人数クラスでは、教員も一参加者として加わり、対話や調べ学習を広げる設計を行う
 - 学年の実態に応じて、グループワークの形(教員参加型・役割分担型)を柔軟に切り替える
-

4. まとめ

- 祝日や行事を見越した年間計画を立て、授業進捗の見通しを持ちやすくする
 - ALTオンボーディングに「見学＋相談期間」を組み込み、安心して関われる体制を整える
 - 少人数・多人数それぞれのクラス特性に応じた活動設計の引き出しを増やす
 - 学校ごとの環境資源(自然・施設)を活かしたGlobeの展開を進める
 - **Globe**について経験のある先生が異動しても円滑な引き継ぎができるように工夫する
-

5. アンケートの結果分析

① 全体の分析と傾向(3～6年共通)

1. 「Globe」への評価は概ね高水準

- 多くの児童が「好き／どちらかといえば好き」と回答
 - 理由として多く挙げられた内容
 - ゲームができる
 - 英語を使う体験ができる
 - いろいろな国の人と交流できる
-

2. 英語の有用性を実感している

- 「役に立つ／どちらかといえば役に立つ」と捉える回答が多数
 - 海外旅行・交流・仕事など具体的な使用場面の想定
-

3. 地域・日本理解の定着

- 東川町のよさ
 - 水・自然・食べ物・人
 - 日本のよさ
 - 食べ物・平和・文化・歴史
-

4. グローバル志向と他者理解

- 他国の人と話したい・友達になりたいという意欲
 - 異なる文化や考え方を尊重しようとする姿勢
-

5. 否定的・慎重な回答の存在

- 「英語が難しい」「あまり好きではない」という声が一部に存在
-

② 学年別の分析と傾向

3年生

- 「楽しい」「知れる」「できる」といった感覚的な理由
- 英語の難しさへの戸惑いも一部に見られる
- 東川・日本のよさを具体物(米・水・自然)で捉える傾向

👉 英語への入口段階として体験重視の学びが有効に機能している。

4年生

- 交流・ゲーム・歌など活動内容への具体的言及
- 地域の特徴を事実や数値(農家数など)で捉える記述
- 「助ける」「関わる」といった他者意識の芽生え

👉 体験を通して理解が深まり始める段階。

5年生

- 英語を生活場面や将来と結びつける回答
- 英語学習への意欲は高いが、自己評価には個人差
- 日本文化を伝えたいという意識の明確化

👉 「楽しい」から「役に立つ」へと意味づけが変化する段階。

6年生

- 英語を文化理解・世界理解と結びつける視点
- 東川・日本を象徴的に捉える表現(写真の町、平和など)
- 英語の難しさを自覚した現実的な回答

👉 理想と現実を踏まえ、次の学びを見据える成熟段階。

③ 見通し

1. 学年進行に応じた学びの変化

- 体験中心の学びから、理解・意味づけへの移行

👉 学年ごとに学習の焦点を意識した設計が重要。

2. 今後の授業づくりへの視点

- 低学年: 交流体験の確保
- 中学年: 交流や地域理解の言語化
- 高学年: 学ぶ理由や社会との接続性

東川中学校

【1年生】

1年生は「東川で活躍する JETs のメンバーを知ろう」と題し、SEA3 名をゲストに招き、生徒によるインタビューの機会を設けました。各グループが事前に準備した英語の質問を中心に会話を進めていきました。即興で対応しなければいけない場園でも、粘り強く、そして楽しく会話をを行い、SEA メンバーを交流できていました。

今年度の 1 年生の授業では、英語を使う場面設定を意識したアウトプットを忘れずに取り入れるよう意識しました。各単元の最後にスピーキングテストやポスター作成などを必ず取り入れ、話したり書いたりすることを習慣づけるようにしました。

2 月上旬にプロフェッショナルを行う予定です。東川町で働く職業人にインタビューを行い、その内容を英語でまとめます。

【2年生】

2 年生のメインテーマは、「ユニバーサル・デザイン」。単元の目標は「だれもが暮らしやすい社会について考え、その方法などについて伝えることができる」。10 月美術科では、誰にでも直感的にわかる表現「ピクトグラム」を学習しました。生徒それぞれが校内向けピクトグラムを制作し、発表活動を行いました。また、東川国際福祉専門学校を訪問し、「白杖を持つ人の支援」「福祉器具の使用」「車椅子の使用と介助」などの体験学習をしました。体験を通して、介護する上で配慮する点、障がいのある方の困難さを理解し、思いやる心を育む目的です。体験とそこから学んだことを今年習った表現を中心に英作しました。12 月には 1 人 1 人が国内の世界遺産を調べてまとめ、発表活動を行いました。また、今年も教科書に載っている曲を中心に英語の歌をたくさん歌いました。英検の受験者も増えてきて、英語力の向上にも役立っていると考えます。

【3年生】

3 年生は「中学生は避難所で何ができるか」をテーマに、地域の一員として中学生は避難所で何ができるか考える活動を行いました。役場の総務企画課から講師を招いて、災害についての講話を聞き、避難所で使われる段ボールベッドを組み立てる体験や、被災時にお互いが助け合うための「できますゼッケン」を作成しました。また、JETs メンバー 6 名と避難所での困りごとについてシナリオワークを一緒に考え、英語でロールプレイをしました。最後に一連の活動についてレポートをまとめました。